

# 2017 夏休みすいせん図書

～本の森へ～



西東京市図書館

# 1・2年生

## 「へいわってすてきだね」

安里有生 詩 長谷川義史 画/ブロンズ新社

この絵本は、日本の一番西にある、沖縄県与那国町立久部良小学校1年生の、安里ゆうきが書いた「へいわってすてきだね」という詩の絵本です。

へいわってなにかな。ぼくは、かんがえたよ。おともだちとなかよし。かぞくがげんき。えがおであそぶ…。へいわへのねがいがこめられています。



## 「わたしのそばできいていて」

リサ・パップ 作 菊田まりこ 訳/WAVE出版

わたしは、みんなのまえで、声をだして本をよむこくごのじかんが、きれい。わたしがつつかえたりすると、みんながクスクスわらう。ある土曜日、ママはわたしをとしょかんにつれだした。としよかんのテンブルさんに「このおへやのわんちゃんに本をよんでくれる?」と、いわれた。ひきうけたけど、うまくよめるかな。



## 「300年まえから伝わりとびきりおいしいデザート」

エミリー・ジェンキンス 文 ソフィー・ブラッコール 絵 横山和江 訳/あすなろ書房

ブラックベリーをつぶして、ホイップクリームとまぜ、ひやしてつくとってもおいしいブラックベリー・ fools。300年、200年、100年くらいまえ、そして、なん年かまえのイギリスとアメリカで、それぞれの時代の4つの家族がつくるブラックベリー・ foolsのお話。れいぞうこがなかったころの、つめたいデザートの作りかたは?



## 「みてるよ! 父ちゃん!!」

くすのきしげのり 作 小泉るみ子 絵/文溪堂

ぼくは、運動会するときようそうが一番になれるかもしれないのに、父ちゃんは大工のしごとでみにきてくれない。「がんばってもしかたない。」そうおもっていたけど、前の日の夜、父ちゃんがぼくのために、やってくれていたことがあった。それがきっかけで、ぼくはときようそうが一番になるやくそくを父ちゃんにしたんだ。



## 「にわとり城」

松野正子 作 大社玲子 絵/こぐま社

びんぼうでのろま、けれど、こころのやさしいむすこ。それから、やせたちっちゃなめんどり。いえも、たべるものもなくなったので、たびにでたふたり。そのとちゅう、まっくらやみとおそろしいまものが、おそいかかります。まものとのなぞなぞたいけつに、むすことめんどりはかつことができるのでしょうか?



## 「サンタクロースのはるやすみ」

ロジャー・デュボアザン ぶん・え 小宮由 やく/大日本図書

きせつのはる。でも、サンタクロースのすむほつきよくは、まだいちめんゆきでおおわれています。つめたいかぜとゆきにあきたサンタクロースは、町にはるの花を見に行くことにしました。クリスマスじゃないのにサンタが町にいたらおかしいので、おしめび(しょうたいをかくす)で、出かけることにしました。



## 「さかさ町」

F.エマーソン・アンドリュース 作 小宮由 訳 ルイス・スロボドキン 絵/岩波書店

リッキーとアンが、ぐうぜんやってきた「さかさ町」。そこでは、何もかもがさかさまでした! かんぱんの文字や、家の屋根もさかさ。お店のものはただで、お年よりはあそんでこどもがはたらきます。ごはんを食べる順番も、デザートが先で、おかずやスープが後。ふうがわりでたのしいさかさ町を、いっしょに冒険しませんか?



## 「もぐもぐどうぶつえん」

なかのひろみ 文・構成 福田豊文 写真/ひさかたチャイルド

どうぶつえんのみんなは、いつもなにをたべているのかな? パンダのだいすきなささ。とてもかたいささのたべかた、してる? ライオンは、まいしゅうしょくじぬきのひがあるんだって! ありくいもしよくじは、むしのありじゃなくて、とくべつなレシピがあるんだ。みんなのたのしいしよくじが、しゃしんでわかる本です。



# 3・4年生

「だれのものでもない岩鼻の灯台」 山下明生 文 町田尚子 絵／絵本塾出版

岩鼻（みさきの先づぼのところがった岩場）にたっている古い灯台。ある日とつぜん、お役ごめんとなり、まいばん暗い海をたらしめていた明かりもきえて、さみしさにすすりないていました。冬がすぎて春になったとき、灯台の足もとで声がします。それは、二階を間借りさせてほしいというのらネコの一家でした。灯台のお返事は？



「うわさごと」 梅田俊作 文・絵／汐文社

友達とケンカしたわたしに、じいちゃんはずいぶん話をはじめた…。じいちゃんの兄ちゃんのクラスに、広島からの転校生・ケンゴがやってきた。兄ちゃんはケンゴとケンカした。「だって、ゲンシ病をうつすやろ」だれもがみんな言ってることだったけど、それを聞いた父ちゃんは、兄ちゃんをにらみつけた。



「はじけろ！パットライス」 くすのきしげのり 作 大庭賢哉 絵／あかね書房

夏休み、おばあちゃんの待つ徳島へ、家族でやってきたハルカは、おばあちゃんが熱中症で入院したことを知ります。おばあちゃんに、なにか食べたいものはないか聞いたハルカに、おばあちゃんは『パットライス』が食べたいと言います。『パットライス』ってなに？『パットライス』を知らないハルカは、おばあちゃんに食べさせてあげることはできるかな？



「つくしちゃんとすぎなさん」 まはら三桃 作 陣崎草子 絵／講談社

学校の帰り道にある、青い三角形の帽子をかぶったような白い家。そこには魔女が住んでいると聞いたつくしちゃん。魔女の家のわきをとおらないと、ひっこしてきた家にかえれません。けど、そこに住んでいたのは、すぎなさんというおばあさん。ひとり暮らしで、植物にくわしくて、さわがしいのがきらいなすぎなさんは、ある日、つくしちゃんが落としたりしたなわとびをひろってくれました。



「ハルとカナ」 ひこ・田中 作 ヨシタケシンスケ 絵／講談社

ハルとカナは、同じクラスであまり話したことがないけど、いろいろなことをじっくり考えるところがよくにっていた。女の子はなぜ女の子同士で固まるのかとか、教室でひとりだとさびしくなるのはどうしてかとかを考えるのって、不思議でおもしろい。そんなふたりがどうやって仲よしになるのかにも、注目の物語です。



「カルペパー一家のおはなし」 マリオン・アピントン 作 清水真砂子 訳 ルイス・スロポドキン 絵／瑞雲舎

デビーのお父さんは大きな紙をくるくるまわしながら、はさみをうごかしています。できあがったのは、すてきな家でした。つぎにおとうさんは、紙人形のおとうさん、おかあさん、そして4人の男の子と4人の女の子を作りました。こうして、なかよしのカルペパー一家ができあがりました。一家の楽しい毎日ははじまります。



「みんなのチャンスーぼくと路上の4億人の子どもたちー」 石井光太 著／少年写真新聞社

日本では、当たり前のように家があって、フトンで寝て、朝ごはんを食べていますが、世界には家がなくて、道路で生活している子どもたちが4億人もいます。ドブ川の水で体を洗う子ども、にごっている水でうがいをし、洗たくをする子ども…。

今、世界のまずい国の子どもたちの暮らしを見た君たちは、何を感じ、何を考えますか。



「どこにいるの イリオモテヤマネコ」 横塚眞己人 写真・文／小学館クリエイティブ

沖縄県の西表島だけにすむ、イリオモテヤマネコ。島にすむひとでさえ、めったに見ることはない野生ネコです。動物写真家のぼくは、うんちや足あと、木に残ったつめあとの「こんせき」を手がかりに、イリオモテヤマネコを追うことにしました。西表島の自然や動物たちの様子が、迫力のある写真で伝わってくる本です。



# 5・6年生

## 「パパ・ヴァイトーナチスに立ち向かった盲目の人ー」

インゲ・ドイチュクローン 作 ルーカス・リュゲンベルク 絵 藤村美織 訳/汐文社

ナチスがドイツを支配していた第二次世界大戦の時のこと。ユダヤ人はユダヤ人というだけで、好きなことができなかったり、収容所へ連れていかれたりしました。そんな時、ドイツ人「パパ・ヴァイト」さんがユダヤ人の目の見えない人達を必死で守りました。何人もの人たちが、彼のおかげで生きのびたのです。



## 「ともだちは海のおい」

工藤直子 作 長新太 絵/理論社

体操がとくいでお茶を飲むのがすきな、いるか。ビールを飲みながら本をよむことと、詩や小説を書くことがすきな、くじら。ふたりは星のきれいな夜、ともだちになりました。海のなかでいっしょに本をよんだり、サーフィンをしたり。すきなものも、体の大きさもずいぶんちがうけど、なかよしなふたりの物語です。



## 「ぼくたちのリアル」

戸森しるこ 著 佐藤真紀子 絵/講談社

五年のクラスがえであいつ、秋山璃在とおなじクラスになった。ぼくたちの学年で、知らないやつはいないってくらい有名人。学年イチの人気者で、スポーツが得意で、勉強も出来て、顔もかっこよくて、性格も明るくて、と完全無欠。そんなすごいやつとおさななじみで、家がとなりどうしのぼく。リアルとくらべられることがいやで、クラスが違うことを理由にさせていたのに…。そんな新学期、転校生がやってきた。



## 「夜間中学へようこそ」

山本悦子 作/岩崎書店

七十六歳のおばあちゃんが、夜間中学へ通うことになった。孫の優菜は、おばあちゃんと同じ中学一年生になり、二人同時に中学生活が始まった。ある日、おばあちゃんが夜間中学へ行った帰り、階段から落ちて捻挫をした。そのことがきっかけで、優菜はおばあちゃんの送り迎えをするため、夜間中学へ通うことになる。そこは、自分の通う中学校とは、違うところだった。



## 「テオの「ありがとう」ノート」

クロディーヌ・ル・グイック=プリエト 著 坂田雪子 訳/PHP研究所

生まれつき両足と左手が不自由で、人に助けってもらうことが多い生活しているため、「ありがとう」ということをたくさん言い続けてきたテオ。12歳になり、自分が他の人たちよりたくさん「ありがとう」と言っていることに、ふと疑問を感じた。「ありがとう」を言わないですむよう、自分でできることをふやそうといろいろなことに挑戦するテオ。すると、「ありがとう」と言われることがふえてきた。



## 「庭師の娘」

ジークリート・ラウベ 作 若松宣子 訳 中村悦子 絵/岩波書店

マリーは草花がだいすきで、庭師になりたいと思っていたが、18世紀後半のオーストリアでは、庭師の仕事は男性のものだった。マリーは父親の希望で修道院で看護の仕事をするようになっていたが、どうしても夢をあきらめられなかった。

そんな時、12歳の天才作曲家アマテウスと出会う。



## 「床下の小人たち」

メアリー・ノートン 作 林容吉 訳/岩波書店

イギリスの古い家の床下に、借り暮らしの小人の一家が住んでいました。ポッドとホミリーの夫婦、そして娘のアリエッティです。一家は、人に見られないようにしながら、上に住む人間のものをいろいろ借りてきて生活していました。ところが、ある日、アリエッティが人間の男の子に姿を見られてしまいました。小人たちの冒険のシリーズは、他に4冊あります。



## 「となりに生きる動物たち」

共同通信社写真部 著/講談社

あなたの家の近くには、どんな動物がいますか？ネコ、イヌ、カラス？あまり思い浮かばない人もいるかもしれませんがね。でも、探してみると、意外にたくさんの動物たちに会えるかもしれません。住宅街のレストランに毎晩あらわれるタヌキの家族。夜の自動販売機にはりついているアマガエル。人間のとなりに生きる、27種の動物たちを写真で紹介した本です。

